

## ルソーの夢

——むすんでひらいて考——（その十）

海老沢 敏

### 八、讃美歌としての《ルソーの夢》（承前）

トマス・ウォーカーが《リボン博士の讃美歌集》の《統篇》の中に、第二六五曲として収めた讃美歌としての《ルソーの夢》は、その後、讃美歌の節としてひろく歌われていったことは事実である。

まずはじめに、マクネヤ<sup>(注1)</sup>別所梅之助共著《改訂讃美歌物語》（昭和八年、画版昭和十三年）の一節を引用してみよう。

「フォーセットのこの三首のうち、第二の歌即ちへ主のしめし

により あたへられし」（讃美歌一六六）の譜 Beattudo はダイクス博士（第四篇参照）の作で、第三のへかみのめぐみをわれらにそそぎ（讃美歌五二）の譜は明治三十六年版（さんびか）では仏国哲人ルッソ（Jean Jacques Rousseau 一七二一—一七七八）のであったが、新《讃美歌》の方では、ウェイド（J. Wadd 18th Century）の Holywood の譜を使用してゐる。第一の歌へかみによりて いつくしめる（讃美歌四〇三）の歌にはそれぞれ国籍を異にしてゐる三人の作曲者がある。「中略」しかしこの人々のうちで最も著名なるは、ルッソである。彼はジュネーヴで生れた故、表面は瑞西人であるが、一生仏国のために身をゆだねた。彼は仏国革命前の半世紀に於て、詩人的哲学者、さては宗教

問題の論客としての活動範囲は、決して仏国帝国内に限られなかった。音楽の見地より言へば、彼は時に作曲し、殊にその音楽辞典は著名である。彼の筆になったもののうち、一つの歌劇がある。一七五二年初めて世に出た“Le Devin du Village”(村の占者)と名づけたものである。この中のメロディーから Greenville という譜が出たのである。独逸の作曲者、クラムメル (Johann Baptist Cramer 一七七一—一八五八) が一八一八年にこのメロディーより一つのピアノ曲を作り、又それが形式を変じて、一つの讃美歌の曲として、一八二五年の頃より、歌はるることになった。即ちこの年に、リッポン John Rippon 博士が編纂した歌集の附録として、初めて英国の社会に出たのであった」(三九七ページ—三九九ページ)

(注一) この書物の原名は以下の通りである。

《Rev. Theodor M. MacNair, M.A.: Familiar Hymns; Their Authors and Composers, with a preface by Rev. Hironichi Kozaki and an Introduction and an Appendix by Rev. Ume nosuke Besho》(Keiseisha, Tokyo, 1917) この書物は宣教師として長く日本で伝道活動を続け、かつ明治学院教授をつとめたセオドア・モンロー・マクネアが著わしたものであり、大正六年に警醒社から出版されたものである。その訳者は儘

田卓一、田中儀三郎、原口愛子であったが、この改訂版の編集は喜多村道がおこなっている。

このマクネアの記述では、ジョン・フォーセット(一七三九—一八一七)なる牧師が作った讃美歌の歌詞《かみのめぐみをわれらにそそぎ》がつけられた《譜》、すなわち楽曲、いわゆる《グリーンヴィル Greenville》の作者をルソーとして説明しているものである。この《グリーンヴィル》は《明治三十六年版の《さんびかに》》収載されているものであるが、多少の相異はあれ、いわゆる《ルソーの夢》の旋律である。その旋律がルソーの《村の占師》の中に含まれていること、クラマーが一八一八年(一)にこのメロディーにもとづいてピアノ曲を作曲したこと、それから讃美歌が生み出されたこと、それが一八二五ごろからであり、リッポン博士編纂の讃美歌集の附録ではじめて英国に紹介されたことなどが主旨であるが、《ルソーの夢》のタイトルについて触れられていないことと、クラマーの曲が一八一八年作曲とされていることをのぞけば、《グリーンヴィル音楽辞典》の第二版の記述と共通している。という点で、マクネアが、他の讃美歌解説書等の文献とともに《グリーンヴィル》を参照したことが窺えるのである。このマクネアの著作に先立って、ジョン・フォーセットについ

て解説し、かつフォーセット作の詩『神よみめぐみを』について触れ、かつ、その歌詞につけられた曲について説明している日本語の文献がある。海老沢亮編著、松本起増補『讃美歌歴史』(明治四十三年、画版大正二年)がそれである。作曲者に関する記述を抜き出してみよう。

「此譜クリーンビル〔原文のまま〕はジーン、ルッソーの作であつて、最も能く知れ渡つてゐるもの一つである。彼は偏僻の天才ともいふべき自由思想家であつた。此譜は素と千七百五十二年頃楽劇の爲めに作られたものであつて、『淋しく悲しき不在の日や』といふ恋歌である。之が多年の後『ルッソーの夢』として知らるるに至つた。併し此不信仰なる哲学者たり音楽者たりまた誤てる道德家たりしルッソーが、此有名な譜を作つたとは、彼自身予期せぬ処であつたらう。彼が夢に聴いた処(伝説に依ればそれは天使の歌であつたといふが)を、此音楽に現はし、以て彼が嫌忌した教会に親しき歌を与へ基督教界をして此の誤てる教師に対して其感情を和らげしめたのである。彼は千七百一十二年ゼ子バに生れた。併し彼は曾て母の愛情を知らず、父の同情や教訓を味つた事もなく、さりとてまた此子供の教養を請合ふ様な親戚の同情を受けた事もなかつた。此等は彼の性格に必然現はれた処であ

る。千七百七十八年七月に歿した。世の凡ての人は彼が書きし全体を喜んで忘るるであらうけれども、此譜は今尚生きてゐる。基督教国にては童子も尚能く此歌を知ると云ふとて強ち誇大ではあるまいと思はれる。」(一六六ページ—一六七ページ)

この説明文とりわけて興味ぶかい点は、第一に二十世紀初頭あるいは十九世紀末から)のキリスト教界のルッソーの人ならびに思想に対する否定的な態度であらう。ここで著者はルッソーの反教會的態度を批判、弾劾しつつも、そのルッソーがこの『有名な譜』によつて、みずからの意図に反して、キリスト教会のために、忘れがたい寄与を果している点を評価しているのである。これはおそらくは著者自身のルッソー観でもあつたらうが、その背景には当然この時期の英國をはじめとする英語圏のキリスト教会におけるアンティ・ルッソーの考えが透いてみえるのである。

しかしながら、この論稿の枠内でのこの説明文の重要な点はむしろ次の三点といつてよいだらう。ひとつは「此譜は素と千七百五十二年頃楽劇の爲めに作られたものであつて、『淋しく悲しき不在の日や』といふ恋歌である」という記述とそれにつづく「之が多年の後『ルッソーの夢』として知らるるに至つた」という説明。そして第三に「彼が夢に聴いた処(伝説に依ればそれは天使

の歌であったといふが）を、此音楽に現はし」という記述である。

第一点はルソーの《村の占師》に原曲があること、そしてそれが《淋しく悲しき不在の日や》なる恋歌であるということであるが、この《恋歌》については後に述べることになるだろう。

第二点についてはクラマーの名前はないが、《多年の後》、ルソーの原曲がルソーの夢として知られることになった経緯を物語っている。そして第三点はルソーが夢の中で聴いたメロディーをこの曲としたこと、しかもそれは《天使の歌》であったことである。

私たちは、ここではやくもあの二つの歌曲《メリッサ》とそして《ルソーの新ロマンス》のことを思い起さずにはいられないのである。ひとつは美しい乙女メリッサが去っていったことを嘆く悲しみの歌であり、もうひとつははかならぬ幸福の島での夢の歌だからである。それが作者が夢で聴いた天使の歌というようにキリスト教的な解釈が加えられているのである。淋しく悲しい不在の歌については前述のようにやがて後に立ち戻ってくることにして、まず天使の歌という解釈について論じてみることにしよう。

フランク・ジョンソン・メトカーフの《讀美歌物語》<sup>(注2)</sup>（一九二八

年）には《グリーンヴィル》（ジャン・ジャック・ルソー作曲）の説明に次のような記述がみられる。「言い伝えではこのフランス作曲家がある日眠り込み、自分が天に連れられて行き、そこで神の天使たちが玉座の廻りに立っているさまを見、また彼らがこの節を歌っているのを聴いた夢を見たという。目覚めるやいなや、彼はこの節を書き下ろしたが、そのためにこの曲はまさに《ルソーの夢》と呼ばれてしかるべきなのである。」（八一ページ）

（注2） Frank Johnson Metcalf 《Stories of Hymn Tunes》  
（New York, 1928.）

クラマーがそのピアノ変奏曲の主題を創作した時、それに《ルソーの夢》とタイトルを附したのは、すでに論じたように、《ルソーの新ロマンス》のテキストを知っていたからであろう。ところが、この讀美歌としての《ルソーの夢》、すなわち《グリーンヴィル》については、このタイトル《ルソーの夢》が、クラマーが意図した《ルソーの新ロマンス》による夢というタイトルの変奏主題》という意味から、《作曲者ルソーが夢みた夢の曲》へと変えられているのである。すなわちルソーが夢の中で恋人を夢みる内容で作ったものと考えた曲を変奏主題に変えて編作し、それに《夢》というタイトルを附したという意味、言い換えれば《ルソー原作クラマー編作変奏主題《夢》》から、《ルソー自身

が夢の中で靈感を与えられて作曲した曲、つまり、しばしば他の作曲家でもエピソード風に伝えられることがあることであるが（たとえばルターニーニ、ベルリオーズなど）、夢の中で旋律を聴き、それを目覚めてから書き下ろして、名曲を得るという物語に変容してしまっているのである。その上で、それが讃美歌の旋律の着想、あるいは創作にふさわしく、ルソーが夢の中で、天使たちの歌を聴き、それをあとで書き写したというキリスト教的な、讃美歌にふさわしい筋書へと変身させられているのだ。

キリスト教の立場からは、プロテスタント（カルヴァン派）からカトリック、そしてまたプロテスタントへと信仰を軽々しく変えて恥じない変節者、〈不信仰なる哲学者〉にして〈誤てる道徳者〉、〈誤てる教師〉であるルソー、『プロテスタントとして教育を受けたが、後年自然神教となった』（メトカーフ）ルソーが、キリスト教界に対して果たしたまさに唯一の貢献として記憶されていた感がある。

そうしたキリスト教界のルソーに対する態度、讃美歌の世界でのこの《ルソーの夢》に対する解釈は扨措こう。既に引用したメトカーフの書物は《グリーンヴィル》について、まず次のような説明をおこなっているのである。この《グリーンヴィル》の旋律は、ルソーのオペラ《村の占師》から採られたが、一七五二年十

月十八日にフォンテーヌブローでフランス国王の前で初演されたこの作品はその後たえず舞台にかけられ、七十五年間もそうしたかたちが続いたあと、やがて上演されることが少なくなっていた。「讃美歌の節として一番最初にあらわれたのは、一八二三年に印刷された《教会音楽のヘンデル・ハイドン・コレクション》の第二版と思われるが、ここでは《グリーンヴィル》と呼ばれている。英国ではコッテリルの《キリスト教讃美歌集》（一八三一年）に見出されるが、《聖体拝受》の名がついている。《聖歌集》（一八四三年）では《ルソー》と呼ばれ、他のいくつかの歌集では《ルソーの夢》と呼ばれている。」（八一ページ）

この記述によると《グリーンヴィル》の旋律が讃美歌としてはじめて現われたのが一八二三年と推定されているが、じつさいには一八一〇年代であることは、すでに述べたことから明らかである。だが、一八二〇年代に入ると、この曲が《グリーンヴィル》と呼ばれることになったという指摘は、この旋律が一般にひろく知られるようになった事実を物語っている。なぜなら、ポピュラーな讃美歌の節は、《エセックス》、《リージェント・スクエア》、《エディンバラ》、《リスボン》、《ゴータ》、《デュッセルドルフ》といった都市、町などの名で通称されることが多く、記号としてのこれらの名前を聴けば、ただちに旋律が思い浮ぶものである。

ったからである。

以下、讃美歌集にみられるこの曲をタイトルともどもいくつか紹介してみることにしよう。

ひとつは《グリーンヴィル》が左側に、そして《J・J・ルソール》が右側に指示されている例である（譜例①<sup>（注3）</sup>）。ちなみにこの讃美歌集では曲譜と歌詞は別になっている。

### ▼ 譜 例 ①

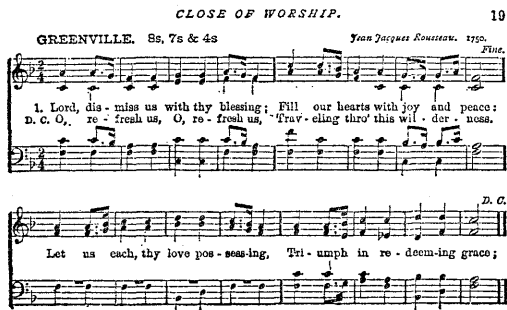


#### *The Church of Christ:*

373

- 487 SAVIOUR, visit Thy plantation ; 2 Let our mutual love be fervent,  
Grant us, Lord, a gracious rain ! Make us prevalent in prayers ;  
All will come to desolation. Let each one esteemed Thy servant  
Unless Thou return again. Shun the world's bewitching snares.  
Keep no longer at a distance ; Break the tempter's fatal power ;  
Shine upon us from on high, Turn the stony heart to flesh ;  
Lest, for want of Thine assistance, And begin from this good hour  
Every plant should droop and die. To revive Thy work afresh.  
John Newton, 1779.

### ▼ 譜 例 ②



1. Lord, dis-miss us with thy blessing ; Fill our hearts with joy and peace ;  
d. c. O., re-fresh us, O, re-fresh us, Trav-eling thro' this wil-der-ness.

Let us each, thy love pos-sess-ing, Tri-umph in re-deem-ing grace ;

つづく譜例②も同様の例であるが、歌詞、作曲年代（<sup>（注4）</sup>）に相異なる。

第三例は《グリーンヴィル》のタイトルだけ示されている例である（譜例③<sup>（注5）</sup>）。

第四例は《ルソー》とのみ記されている例である（譜例④<sup>（注5）</sup>）。この譜には右側に《フランス歌曲》と記されている。

▼ 譜 例 ③

6

SABBATH AND SANCTUARY.

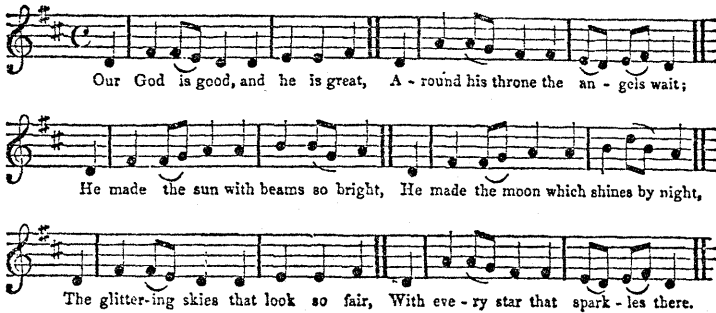
GREENVILLE. 8s & 7s. DOUBLE.



▼ 譜 例 ④

ROUSSEAU. 6. 8's. or L. M.

*French Air.*



The mountains and the rocks he made,  
And all the hills in order laid;  
He poured the water in the seas;  
He made the grass, the herbs, the trees,  
The valleys, and the fields so fair,  
And every flower that blossoms there.

The lion and the tiger bold,  
The sheep and cattle of the fold,  
The little birds that sweetly sing,  
The insect with its beauteous wing,  
The fishes—all we see that's fair  
Or good—He made and placed them there.

これらの讚美歌を眺めわたしてみると、歌詞にいつても種々のものがつけられて歌われているが、曲自体もちろめな変化が加えられ、変容を示している。こうした音楽上の問題について、ついで簡単に触れておへんきであらう。(ついで)

(国立音楽大学)

and Arranged by Rev. Charles H. Richards.》(New York, 1882.)

(註5) 《Hymn and Tune Book, for the Church and Home》(Boston, 1871.)

(註6) 《One Hundred Tunes, with Hymns and Poems, for the Use of Infant and Juvenile Schools, and Families; to which is Prefixed a Simplified System of Teaching to Sing at Sight. Prepared at the Request of the Committee of the Home and Colonial School Society by Charles H. Purday.》(London, ?)

(註7) 《Sacrifice of Praise, with Tunes. Psalms, Hymns, and Spiritual Songs Designed for Public Worship and Private Devotion. With Notes on the Origin of Hymnes.》(New York, 1872.)

(註8) 《Songs of Christian Praise with Music. A Manual of Worship for Public, Social and Private Devotion. Selected